

聖書：使徒 13：42～52

説教題：永遠のいのちにふさわしい者

日時：2014年1月19日

パウロの第一次世界伝道旅行、ピシデヤのアンテオケにおける出来事です。前回はこの町の会堂におけるパウロの説教を見ました。彼は旧約の歴史を回顧し、その歴史が指し示すイエス・キリストについて語り、その方において提供されている罪の赦しと義認の福音について語りました。この説教を聞いた人々の反応が今日の箇所に記載されています。42節に「ふたりが会堂を出るとき、人々は、次の安息日にも同じことについて話してくれるように頼んだ。」とあります。人々は会堂の集会が終わっても、パウロとバルナバについて行って話を聞きます。その人々に二人は、いつまでも神の恵みにとどまるように！と勧めます。ところが問題が起ったのは次の安息日。そこには二つの反応が現れました。

まず最初に見たいのは、ユダヤ人の反応です。この日、集まったユダヤ人たちは、一週間前とは打って変わってパウロの話に反対します。さらに口ぎたなくののしった、とさえ書かれています。一体なぜこんなことになったのでしょうか。それは町じゅうの人が神の言葉を聞くために会堂に集まって来たことと関係していました。43節の「ユダヤ人と神を敬う改宗者たち」とは、ユダヤ人と、ユダヤの宗教に改宗してユダヤ人に帰化した人々のことでしょう。しかしこの2回目の安息日には、ほとんど町じゅうの人が集まって来ました。ここは異邦人の町ですから、町じゅうの人とはほとんど異邦人ということになります。彼らは前の週になされたパウロの説教についての噂を聞いたのでしょうか。人は律法を守ることによって救われることはできないが、ただイエス・キリストへの信仰を通して、罪を赦され、神の前に義と認めていただける。これを聞いて、大勢の人が会堂に詰めかけたのです。その人々にパウロはあなたがたはそのまま神の祝福にあずかることができるというメッセージを語っている。これがユダヤ人たちには気に入らなかった。むしろねたみに燃えて、先週は受け入れた福音を否定し、冒瀆するまでに至ったのです。

ユダヤ人の中にあつた思ひは、このままだと自分たちの優越性が失われるということだったでしょう。異邦人が救われるのは結構だが、そのためにはユダヤ人に帰化してもらい、自分たちと同じように律法を守り、割礼を受け、宗教生活をしてもらわなければならない。ところがパウロは律法を守ることなしで、ただイエス・キリストを信じることによって、救われるということ語っている。これだとこれまで見下して来た異邦人との区別がなくなってしまう。自分たちの優位性は失われ、自分たちは彼らと一緒に存在になってしまう。これはとても受け入れられない！

これは言い換えれば、救いのためにただキリストにより頼むのか、それとも自分の行ないや努力、ユダヤ人としての立場により頼むのかということです。彼らはユダヤ人の間でパウロの福音に接した時は、大変興味深く聞いたものの、異邦人たちがドーッと会堂になだれ込んだのを見た時には、その教えを認めるわけにいかないという態度を取ったのです。キリストの恵みにだけでなく、なお自分たちの立場、わが、プライドにより頼み、固執したのです。そしてパウロに反対し、その福音を冒瀆する言葉さえ語ったのです。

そんな彼らにパウロとバルナバが宣言した言葉が 46 節以降にあります。まず注目したいのは、この福音を拒むことによって、あなたがたは「自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めた」と言っていることです。永遠のいのちにふさわしい者とは誰でしょうか。誰も、私は永遠のいのちにふさわしいと言える人はいません。すべての人は、これにふさわしくありません。しかし神はただイエス・キリストにおいて、ただ恵みによって、私たちに永遠のいのちを与えてくださいます。天国はただ恵みによって入れるところです。しかしこの町のユダヤ人は、恵みによって入るのはイヤだ！という態度を取りました。自分たちは自分たちの優越性、卓越性、立派さによって入りたいという態度を示しました。そうすることによって、あなたがたは自分を永遠のいのちにふさわしくない者とした、とパウロは言っているのです。

パウロとバルナバは、このユダヤ人の反応を見て、もう一つのことを語ります。それは「私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます」ということです。まず福音はユダヤ人に、というのは聖書が一貫して示している原則です。神はまずイスラエルを選ばれました。イエス様も「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外のところには遣わされていません。」と言われました。しかし同時に聖書が示していることは、イスラエルの選びはそれ自体が目的ではなく、それは全世界に奉仕するためだということです。神がアブラハムを選ばれた時、創世記 12 章 3 節で「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される」と語られ、最初から全世界を視野に入れておられたことが明示されていました。しかし今、ユダヤ人が神の福音を退け、自らを永遠のいのちにふさわしくない者とししました。そこでパウロたちは、それゆえ私たちはこれから異邦人のほうへ向かう、と語ったのです。パウロが 47 節で引用したイザヤ書 49 章 6 節は、イスラエルとダブる形でメシヤの使命について預言した御言葉です。メシヤはまことのイスラエルとして、異邦人に光をもたらすという神の計画を真に実行する方となる。パウロはそのメシヤに仕える者として、自らもまたこの使命を果たすことにこれから向かうと述べているのです。

私たちがここでしっかり心に留めたいことは、神は昔から異邦人の祝福を考えておられたということです。ここでイザヤ書が引用されたように、旧約時代から神は全世界を心にかけておられた。単にこの時、ユダヤ人たちに拒否されたから、パウロたちは仕方なく異邦人のところへ向かうのではないのです。神はこの御心をずっと持っていてくださったのであり、時至ってメシヤを遣わし、そして今パウロたちを用いて、その御心を益々実現しようとしておられる。ですから今日、私たちのところにこうして福音が届けられているのはたまたまではないのです。そうではなく神のご計画に基づいて、それが実行に移されて、私たちの所にまで届けられた、また届けられているということなのです。

第二に見て行きたいのは、異邦人たちの反応です。48 節に「異邦人たちは、それを聞いて喜び、主のみことばを賛美した。」とあります。その際、そこには注目すべき表現がされています。それは 48 節の「そして、永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰に入りました。」というところです。二つのことに注目したいと思います。一つはここに改めて異邦人の救いは後から取って付けたものではないこと、たまたま成り行き上そうなったものではないことが示されているということです。この言葉によれば、異邦人もまた、永遠のいのちに定められていた人たちの中にきちんと含まれていた。神は単に異邦人のことも考えて入れているよ～という程度ではなく、時至って必ず救われるようにあらかじめ定めていた。そしてもう一つこ

こから思わされることは、私たちの救いと神の予定との関係についてです。「予定論」と言うと、ある人々は顔をしかめるかもしれませんが、聖書がこれによって私たちに教えようとしているメッセージを私たちは正しくつかむ必要があります。この予定の教理が教えていることは、「私たちの救いは、ただ神の恵みによる」ということです。もしこの教えが聖書になかったら、私たちは救いをどう考えたでしょうか。なぜこの私が救われたのか。それは私が信仰告白したから、ということになります。つまり私たちの救いは、人間の決断にかかっていることになります。ある意味でそう言えないこともありません。しかしより深く考えるなら、それはそれに先立つ神の選びまた恵みによっているということを聖書は教えています。これは信仰を持った私たち一人一人がみな経験を通して知っていることでしょうか。最初は、自分が信じたと私たちは思っていました。私が決心して回心した。これは私の自由意志でなしたことである、と。しかし信仰生活を続ける中でだんだんと分かって来ることは、私が神を選んだのではなく、神が私を選んでくださったという事実が根底にあるということです。この信仰生活は私が求めて、私が勝ち取ったものと言うよりは、神によって導かれ、神に与えていただいたものであるということです。ここで異邦人たちはパウロの言葉を聞いて信仰に入りましたが、ルカはこのことの背後には、神が彼らを永遠のいのちに定めておられたという恵みの事実があったことを示しているのです。

もちろん私たちはこれをもとにして、自分が神を信じない言い訳にはなりません。私たちは自分が神に選ばれているかどうかを前もって知ることはできません。その神の神秘に立ち行って、永遠のみこころを覗き見してから、信仰に入るかどうかを決めるようにとは言われていません。私たちに求められていることは、目の前に差し出されている福音を信じることです。あらゆる箇所で「福音を信じなさい」「イエス・キリストを信じなさい」とだけ命じられています。この命令に従ってキリストを信じる時に、私は実は神の選びにあずかっていたのだということが後に分かって来る。ただ単に自分が決心したということ以上に、神が私を導いてくださったという大きな恵みの世界に生かされていたことを知るようになるのです。そういうことからすれば、私たちが今こうして福音の言葉を聞いているということ自体、私たちが神の選びの中で導かれているということを暗示しているのではないのでしょうか。少なくともその可能性が非常に高いことを示しているのではないのでしょうか。この福音を信じて神に選ばれていたことをはっきり知り、神の大きな恵みにより頼む歩みに進むようにとの招きを受けていると私たちは自らを考え、ふさわしい応答へ進むべきではないのでしょうか。

異邦人たちはこの福音を信じて、救いの大きな喜びに入れられました。49節の「こうして、主のみことばは、この地方全体に広まった。」というのは、パウロやバルナバの活動ばかりでなく、信仰に入った異邦人たちの喜びのあかしが溢れて、広まったということでしょう。そしてここには迫害が生じたことが記されています。50節にユダヤ人たちは色々な人々を扇動して、パウロとバルナバを迫害したと記されています。そのため、二人はこの町を出て行かざるを得ない状況に追い込まれます。信仰を持った直後に、異邦人たちは難しい状況に置かれました。しかし最後の52節に「弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。」とあります。確かに目の前に困難はあるけれども、それをはるかに上回る喜びが彼らを支配していたのです。主が与えてくださる救いは、そのようにどんな苦しみや悲しみ、戦いをも上回るものです。

私たちも今、福音を目の前にしています。今日の箇所から教えられることは、これはたまたま私の前にあるのではないということです。そうではなく、神がはるか昔より、異邦人である私たちの救いを心に掛けてくださり、それが現実化するように力強く導いてくださったので、今この福音を私たちは目の前にしているということです。これは神のお心の現われです。私たちはこの神の導きの前に、どう応答する者でしょうか。ここまで差し出してくださっているのに、それを退けるなら、それは私たちが自分を永遠のいのちにふさわしくない者とするということです。そのように自分で自分の将来を恐ろしい方向に決めることがありませんように。むしろ私たちは神の導きを感謝して、福音において提供されているイエス様を信じたい。そして「永遠のいのちに定められた人たちが、信仰に入った！」という出来事が、今ここで私の上にも成就するように。またすでに信仰を告白し、救いに入れられた者たちは、ここに記された神の思いを改めて自らの思いとしたいと思います。選ばれた者は奉仕のために選ばれています。「わたしはあなたを立てて、異邦人の光とした。」という言葉は、私たちにも当てはまります。神はさらに世界の多くの人々が、この光の中に入ることを願っています。この福音を伝える働きにはパウロやバルナバのように困難が伴うでしょう。しかし私たちが福音を伝える時、その福音を通して、「永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰に入った」という出来事が、世の終りまで継続して起こる。その神のわざのために、神と心をつにして御国の完成のために仕える特権と光栄に歩みたいと思います。